



公共交通機関の撤退から地域を守れ

平塚市の土屋地区は北西部の丘陵地帯にある山里の雰囲気を残した平塚市の中でものどかな地域です。地域がら農業に従事する方も多いのですが、市境を越えて小田急線の秦野駅方面にもバス路線があり、都会的な平塚の良さと秦野周辺の豊かな自然の両方が感じられる地域です。土屋地区には現在、神奈川大学のひらつかキャンパスがありますが、令和5年までに横浜などに移転する計画が発表されています。湘南ひらつかキャンパスは平成元年（1989年）にこの地に開設されました。現在も約1500名の学生が在籍しておりその3分の1は平塚市内に在住しています。また職員や学生の通勤・通学の足としてバス路線が整備され、JR平塚駅や小田急秦野駅の路線は1時間に3～4本のバスが運行されています。

湘南ひらつかキャンパスができる以前には1時間に1本もなかった地域を走るバスがキャンパスの整備とともに急激に整ったという経緯があります。今後のキャンパスの移転に伴ってこれらのバス路線も減便や廃止される懸念もあり、通勤・通学はもとより地区内には商店やクリニックもほとんどないことから買い物や通院などの日常生活が危ぶまれる心配があります。

そこで地域の自治会が中心となって買い物や通院の移送支援を行えないかという議論が湧き

起こりました。一方で高齢者の介護予防のために地区で行われている「ふれあいサロン」への送迎もやって欲しいという意見もありました。地域内に限定された移送支援であれば公共交通機関との競合もなく問題ないように思いましたが、地域の外の駅周辺の市街地や他市への買い物支援となるとさまざまな問題が出てきました。

まず移送支援に使う車両の問題があります。自家用車を使っても燃料代や自動車保険料をどうするのか、万一の事故の際の補償をどうするのかなどもその一つです。しかし「悩んでいるばかりでは何も解決しない」と方針を転換し、サロン送迎プロジェクトと買い物・通院支援プロジェクトに分け、それぞれのプロジェクトで最低限のルールを決めて試行運転を始めることにしました。

行き先は利用者から要望の多かった市内のスーパー2軒と峠を越えた隣接自治体にあるスーパーに決め、通院については利用者によってクリニックが異なるため移送支援の予約の際に指定してもらい往路のみの利用としました。数ヶ月の試行運転ののち、令和3年の4月からは正式運用に切り替えて運用を続けています。何事も初めてみなければわからないことが多いと痛感させられた1年になりました。

●基本情報

項目	内容
地区名	土屋地区
実施主体	大庶子分自治会
開始時期	令和3年(2021年)7月
利用対象者	大庶子分自治会に加入している人
利用者数	7名
車両台数	(福)つちや社会福祉会所有の車両2台
自動車保険等	保険料、ガソリン代は(福)つちや社会福祉会の負担
運転者数/主な運転者層	5名(60歳から70歳代の平塚市の安全運転講習会修了者)
送迎に係る利用者負担	無償
予算規模	なし
今後の課題	・今後、継続的に運転者を確保していくことが大きな課題です。

●利用者・支援関係スタッフの声



利用者Aさん
本数の少ないバス便を乗り継ぎ医院まで行っていたが、外出支援をしていただきありがたい。特に雨の日は苦勞しているので助かっています。



利用者Bさん
自宅から、通院している医院まで送っていただけるのでとても助かっています。



利用者Cさん
コロナ禍で、1人で家にこもり誰ともお話をしない時間が多い中、定期的に地域の人に送迎を通じてお話ができるのが楽しみで感謝しています。



瀬川健治さん(ドライバー・大庶子分自治会長)
利用者の方が、土屋に住んでいてよかったと思われるように外出支援を続けていきたい。また、土屋の他の自治会でも始動されることを望みたい。



内海正男さん(ドライバー・中庶子分自治会長)
月1、2回の送迎を行っています。自治会の人と会話ができるのが楽しみです。



木村幸利さん(ドライバー・下庶子分自治会長)
送迎をして、利用者から息子や孫に気兼ねなく利用できるのがうれしいとの声を聞いてうれしく思っています。